千葉科学大学紀要　13．103－110．2020
【総説】

高等学校の特別活動に関する研究動向

Role of special activities in high school: A Review

熊谷　圭二郎

Keijiro KUMAGAI

現在，学校教育では，新たな社会で必要とされる資質・能力の育成が求められ，教育活動全体を通して育成されることが求められている。しかし，高等学校の場合，教科教育や部活動が重視され，教育課程の1つである特別活動は生徒任せになっていたり，実質的に進路指導の時間になっていたりすることが多い。そこで，本研究では，高等学校における教育課程の1つである特別活動の先行研究を調べ，特別活動の現状について明らかにし，その結果をもとに，特別活動が「協働して学ぶ態度」を育成する場として機能する上で必要なことを検討することを目的とした。その結果，大きく「ホームルーム活動」と「特別活動全般」の2つのカテゴリーに分かれ，前者の「ホームルーム活動」については，さらに4つの知見，後者の「特別活動全般」は3つの知見に分かれ，それらを整理した。そのうえで特別活動を協働の場として機能させるために必要な課題について指摘した。

【問題と目的】

現代は，より高い知識・技能を身につけ、効率よく製品を作ることが求められていた「工業社会（近代型社会）」から，変化が激しく，常に，新しい未知の課題に試行錯誤しながらも対応することが求められる「知識基盤社会（ポスト近代型社会）」へと変化している。このような社会の変化に対して2003年に経済協力開発機構（以降OECD）のプロジェクトDeSeCo（Definition and Selection of Competencies : Theoretical and Conceptual Foundations）は「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要な能力を「キー・コンピテンシー」として定義づけ，「多様な社会グループにおける人間関係形成力」「自律的に行動する能力」「社会・文化的技術的ツールを相互作用的活用する能力」の３つの能力の育成の必要性を指摘した（Rychen & Salganik,2003[1]）。

この新たな社会において求められる資質・能力の育成は我が国の学校教育においても必要とみられている。例えば，2007年に改正された学校教育法では「学力の三要素」として「基礎的な知識・技能」「思考力・判断力・表現力等の能力」「主体的に学校に取り組む態度」の3つの資質・能力の育成を挙げている。また，2017年（高等学校は2018年）に告示された新学習指導要領においては、「資質・能力の3つの柱」と称して「生きて働く知識・技能の習得」「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間力等の涵養」の3つが挙げられている[2]。

このように我が国の学校教育において育成すべき資質・能力として3つの要素が取り上げられることが多いが，高等学校では，「高大接続システム改革会議『最終報告』」において，まず「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」を養うことを挙げ，その基盤として「思考力・判断力・表現力等の能力」の育成，さらにその基礎として「知識・技能」の習得を挙げている[3]。これに対して溝上（2017）[4]は、高等学校の場合，「多様な人々と協働して学ぶ」という態度の育成については，「出口に近い高校教育の役割、ひいては学校から仕事・社会へのトランジションを見据えて重要」だと指摘している。つまり、新たな社会に向けた資質・能力として「学力の3要素」が取り上げられているが，高等学校の場合，様々な人と「協働して学ぶ態度」の育成は欠かすことができないものだと考えられる。

そこで高校生に対して求められている学力の3つの要

連絡先：熊谷圭二郎　kkumagai@cis.ac.jp
千葉科学大学教職課程
Teacher-training Course，*Chiba Institute of Science*
（2019年9月25日受付，2019年12月12日受理）

素を育成するために，現在の大学入試センター試験を廃止し，2020年から大学入学者共通テストを実施するなどの改革を行い，「『学力の3要素』を多面的・総合的に評価する入学者選抜への改善」を行うこととなっている（文部科学省，2016）[5]。また，新学習指導要領では，「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点から授業改善）の実施が取り上げられ，各教科を通した授業のあり方が注目されている。さらに我が国の高等学校において「協働して学ぶ態度」を育成する場としては，教科活動のみならず，教科外活動での取り組みも挙げられる。とくにホームルーム活動，生徒会活動，学校行事の3つの領域からなる特別活動は，古くから高等学校の教育課程の一つとして位置づけられ，「なすことによって学ぶ」ことを方法原理とし，集団活動を通して資質・能力を育成する重要な役割を果たしてきた。

しかし，江坂（2012）[6]が「高校では『学級経営』という概念がうすく，まして担任の関与が必要であるという認識は低い。生徒は放っておいても成長していくと思っている教員が多い」と指摘しているように，高等学校の場合，特別活動といった集団活動での学びに関しては，生徒の自主性・自発性に任せていたところが多いと予想される。また，文部科学省（2018）[7]は，特別活動の問題として，「各活動･学校行事において身に付けるべき資質･能力は何なのか，どのような学習過程を経ることにより資質・能力の向上につなげるのかということが必ずしも意識されないまま指導が行われてきた」と述べている。つまり，高等学校の特別活動に関しては，生徒が主体的，自治的に行うべきであり，教師が関わるべきではないといったビリーフの存在や特別活動は「協働性や異質なものを認め合う土壌を育むなど，生活集団，学習集団として機能するための基盤になる」（文部科学省，2018）[8]という考え方が高校現場に定着していないことが推測される。

そこで，本論文では高等学校における特別活動の先行研究を調べ，特別活動の現状について明らかにするとともに，特別活動が「協働して学ぶ態度」を育成する場として機能する上で必要なことを検討することを目的とする。

【方法】

文献検索については，高等学校における「特別活動」「ホームルーム」「学級」「行事」「生徒会」「委員会」をキーワードに国立情報学研究所の学術情報検索であるCiNiiで2000年から2018年までの論文を検索した。はじめに学会等の学術団体が発行している学会誌を中心に論文検索を行った。しかし，実践的な活動に関する論文は少なかったため，これらの研究雑誌に掲載された論文中に引用されている論文や学会発表論文集に掲載されている発表論文，大学紀要なども含め，本研究に関係する文献対象として検索し，45件を抽出した。その結果，これらの文献は大きく「ホームルーム活動」と「特別活動全般」の2つのカテゴリーに分かれ，前者の「ホームルーム活動」については，①生徒の資質・能力の育成としてのホームルーム活動に関する知見，②キャリア教育としてのホームルーム活動に関する知見，③集団への適応の促進としてのホームルーム活動に関する知見，④様々な教育活動としてのホームルーム活動に関する知見，の4つのカテゴリーに分かれた。また，後者の「特別活動全般」については，①特別活動の効果に関する知見，②特別活動の実態に関する知見，③特別活動の問題に関する知見，の3つのカテゴリーに分かれた。

【結果】

1．ホームルーム活動

(1) 生徒の資質・能力の育成としてのホームルーム活動に関する知見

生徒の資質・能力の育成をねらったホームルーム活動の実践研究として，たとえば，社会性の育成や合意形成，コミュニケーション能力などの育成が報告されている。社会性の育成としては，ソーシャルスキルトレーニングを高校生に実施した研究がいくつか見られ（本田，2015[9]；星・渡辺，2016[10]；原田・谷村・山田・渡辺・安川，2007[11]；小林・稲垣・丹保・土合・山岡・多賀・菅原・川上・池上・島，2003[12]；森・蓑崎・森本・長瀬・嶋田，2012[13]），その効果として，ソーシャルスキルや自尊心の向上（原田･渡辺，2011）[14]，ソーシャルスキルの読解，主張性，感情統制の促進（原田，2014）[15]などが指摘されている。しかし，原田（2014）[16]はソーシャルスキルトレーニングが効果的に行われるためには，限られた時間・メンバーだけで実施するのではなく，教職員の支援体制や教科との連携など体系的・組織的に行なうことの必要性を指摘している。また，木内（2008）[17]は，合意形成までに至るプロセスを「自己表出性」「仲間受容性」「創作性」「創意性」の4つの下位概念に分けるとともに，協創体験過程の実践化を目的として，高等学校における方法論の実践事例を考察している。なお，協創体験過程とは，「最初に十分な個人検討を行い，それを踏まえて自己表現すること，そのことが互いの仲間の受容を引き出し，集団活動の所産（成果）の分かち合い・共有を目指して粘り強く練り上げていくという，より凝集性や帰属感の高い集団づくりを意図したもの」だという。また，高校生のコミュニケーション能力を育む取り組みとして野崎・渡邉（2001）[18]，田（2015）[19]，岡邑・歌川（2018）[20]等が挙げられる。この他，ホームルーム活動での実践を通してアクティブ・ラーニングに関わるスキルを育成しようとする試みも見られる。たとえば，関根・森下・田中（2016）[21]，関根・森下（2017）[22]は入学生に対し

Covey（1989）[23]の「7つの習慣」に基づいて作られたふり返り力向上手帳による担任の指導やホームルームにおけるグループワークなどを行なうことで，自己管理能力や対人関係能力を向上させ，アクテイブ・ラーニング型授業のために必要な基礎的能力を育成することを目的とした研究を行っている。

以上，生徒の資質・能力の育成としては，グループワークを活用して生徒のソーシャルスキルや自己管理能力など様々な資質・能力の育成がなされていることが確認された。しかし，これらは1時間単位の活動であったり，継続的な実施であったりする。学習指導や進路指導，部活動などによって，ホームルーム活動の時間が限られている高等学校の現状を考慮した場合，このような活動の実施が難しいことが想定される。また，高等学校によっても育成すべき資質・能力にも違いがあると考えられる。各高等学校の現状を踏まえてどのような資質・能力を，どのように育成するか，検討が必要である。

(2) キャリア教育としてのホームルーム活動に関する知見

ホームルーム活動においてキャリア教育を実施している研究がいくつか見られる（中井，2004[24]；堀出，2014[25]；林，2015[26]；長谷川，2015[27]）。たとえば，住岡（2003）[28]は，経営学で生み出された目標管理の考え方を利用して進路指導を行なうことの有効性を指摘している。具体的には教師による進路指導方針の明示，情報提供などのもと生徒自身が目標を立案し，その決定への参画，自己管理・自己評価をすることによって意欲や充実感を醸成するというものである。そこでの担任の役割は，生徒自身が現状把握，現状分析，改善策の考案ができるように関わることであるが，問題としては担任と生徒というタテのコミュニケーションを重視するため，生徒同士の対話が疎かになることを指摘している。また渡辺（2012）[29]は3年生に対してキャリア教育を意識したホームルーム活動を，年間を通して取り入れた実践の報告をしている。この実践に関する生徒アンケートから実践内容に関して概ね良好の感想が得られたが，積極性に関する自己評価としては半数までいかなかったと報告している。木村（2008）[30]は，アサーション・トレーニングやソーシャルスキルトレーニング，ラボラトリー方式など6つのグループアプローチの特徴と生徒の実態を把握したうえで，キャリア教育の一環として高校2年生にグループアプローチを実施している。その結果，自尊感情や自己評価，進路決定スキルが向上したこと，ウォーミングアップとして行った簡単なゲームが生徒のより良い人間関係の構築に寄与できたことを報告している。

以上，キャリア教育としては，その効果が示される一方，教師―生徒のタテのコミュニケーションになりやすいことや積極性の育成としては不十分なことが確認された。しかし，特別活動はキャリア教育の中核を担うだけではなく，「特別活動の充実により各教科等の主体的・対話的で深い学びが支えられる」とされている（文部科学省，2018）[31]。「主体的・対話的で深い学び」の実現のために特別活動の一つであるホームルーム活動においてどのような取り組みが必要かは検討されていない。

(3) 集団への適応の促進としてのホームルーム活動に関する知見

ホームルーム活動において集団への適応を意図した先行研究がある。たとえば，大谷・粕谷（2016）[32]は，高校生の学級適応を支援するためのグループアプローチを行い，その効果を指摘するとともに，生徒集団や教員および校内体制の実態に応じた工夫の必要性を挙げている。増田・内田（2007）[33]は，集団主張訓練プログラムを高校生に実施し，対人関係に及ぼす影響について研究をおこなっている。木村・苅間澤（2013）[34]は高校生の適応を図る活動として構成的グループエンカウンターを取り入れ，新入生の学校適応に効果があったことを指摘している。また，井上・成田（2003）[35]は，クラス経営や集団づくりに利用されている集団的表現活動であるコミュニケーション・ゲームを3回，各90分実施し集団内対人信頼感の変化について調べ，自己信頼感が上昇したことを指摘している。

以上，集団への適応の促進としては，グループワークなどの活動を行うことで集団づくりや生徒の集団適応を促進しようとする取り組みが確認された。しかし，その集団での適応がその後も続くのかといった縦断的な研究はなされていない。

(4) 様々な教育活動としてのホームルーム活動に関する知見

ホームルーム活動は上記以外，様々な教育活動が行われている。たとえば，道徳性の育成にかかわる研究（木内，2011）[36]や人権・同和教育を行った研究（林・河合・荒木・金沢，2001）[37]，多文化共生をめざした取り組み（末藤，2008）[38]なども挙げられている。また，特別活動としてシチズンシップ教育を行った実践（越野，2011）[39]，地域に対する愛着および協働意識を育む取り組み（宮前，2015）[40]，防災意識を高める取り組み（藤原，2016）[41]など多様なものが挙げられる。この他にもホームルーム活動では学校行事に向けた話し合いや準備，消費者教育，有権者教育，ボランティア活動など様々な教育活動が行われている。

以上，様々な教育活動としては，学校や地域の特性により多様な取り組みが行われていることが確認された。しかし，高等学校のホームルーム活動において年間を通して計画的に進められているプログラムの研究は見当たらなかった。

2．特別活動全般

(1) 特別活動の効果に関する知見

高等学校における特別活動に関する研究自体非常に少ないものであったが，そのなかでも数が比較的多かったのは，特別活動の効果に関する研究であった。高等学校における特別活動の経験と大学生活の自己評価との関連を検討した保田・保田（2014）[42]は，①高等学校での学校行事に積極的に取り組むことが人間形成力を高めるうえで役立つこと，②委員会活動に積極的に取り組むことが自主的な学習を進める力を獲得するうえで有効であること，③ホームルームで，学校で起こった問題について話し合うことも大学生活をスムーズに進めるうえで役立つことを示唆している。河本（2014）[43]は，大学生670名に対し中学・高校の学校行事体験を想起してもらった結果，「集団への肯定的感情」「他者意識の高まり」「集団活動に対する消耗感」「問題解決への積極性」「他者統率の熟達」「学校活動への更なる傾倒」の6つの意味づけがなされ，学校行事体験がライフイベントとして個人の心理社会的発達上，重要な意味を有することを示唆している。

また，高瀬･長島･久永（2017）[44]は，高校生･大学生･教員に対してアンケート調査を行い，高校時の特別活動等のそれぞれの活動がコンピテンシーに及ぼす影響を調べている。この調査の結果，①コンピテンシー向上に最も貢献したと考えている活動は，「ボランティア活動」であり，次いで「部活動」,「学校行事（校内行事）」である，② 特別活動等全体において，最も向上したコンピテンシーは，「人との交流・協業」であり，次いで「主体性・積極性」，「リーダーシップ」の順である，③とくに貢献度の高い活動とコンピテンシーの組み合わせは「部活動」の「人との交流・協業」であり，次いで「ボランティア活動」の「職業観･社会への関心」,「ボランティア活動」の「人との交流・協業」の順である，④とくに貢献度の低い活動とコンピテンシーの組み合わせは，「ホームルーム活動」と「職業観･社会への関心」であり，次いで「学校行事（校内行事）」と「職業観・社会への関心」，「生徒会活動」と「職業観・社会への関心」の順であると指摘している。

さらに生徒会活動に限定した研究として樽木・髙田（2017）[45]は，大学生に対して生徒会活動での活動経験にどのような学びを見出しているかを検討するために大学生に対して自由記述のアンケート調査を行い，①自発的・自治的活動の体験が達成感や学校生活への満足感を得るきっかけとなっていること，②小学校より中学校，さらに，高等学校と進学するに従い，自発的・自治的活動が深まることを示唆している。

以上，特別活動の効果として，人間形成力や個人の発達，資質・能力を高める可能性があることが確認された。高大接続という観点から大学における初年次教育が重視されているが，初年次教育の目的である「能動的で自律的な学習態度への転換」「人間関係の構築」という点で特別活動は大きな役割を担っている（保田・保田，2014）[46]。しかし，特別活動におけるどのような経験が大学の適応などに影響するのかは明らかになっておらず，検討が必要である。

(2) 特別活動の実態に関する知見

特別活動の実態調査として山本（2016[47]，2017[48]）は，大学生にアンケートを実施している。その結果，文化祭や体育祭，球技大会，修学旅行は8割以上の高校で実施され，ロングホームルームの運営形態については公立では，生徒主体，担任主体ともに34.8％で自習が19.7％，私立では生徒主体が23.8％で担任主体が47.6％，自習が14.3％という結果になっていることを報告している。また，ホームルーム活動の内容に関しては，「ホームルーム内の組織づくりと自主的な活動」「教科・科目の適切な選択」「進路適性の理解と進路情報の活用」「主体的な進路の選択決定と将来設計」が70%を越える高い割合となっている。これに対して「望ましい勤労観・職業観の確立」の割合が極端に低いことから高等学校では上級学校への進路指導偏重の傾向があることを指摘している。伊藤（2018）[49]は定時制高校における特別活動の実態を調べるために生徒たちがどのように過ごしているかについて集団主義者，個人主義者に分けてインタビューを行っている。その結果，両者ともに，集団活動をまじめに行わず，やり過ごすことで，重大なリスクを避けようとしていることが示唆された。西川（2018）[50]は，高校生の文化祭活動に対する取り組み意識の違いを調べるために，時期とその時の気持ちを分析するコンジョイントカードを用いた調査を行った。その結果，文化祭の催し物により，生徒の文化祭活動の取り組みに対する感じ方や気持ちが男女で異なる様相を呈していたことを報告している。

また，特別活動は学校タイプや地域の特色などによって様々なものが行われている。たとえば，中川（2005）[51]はスーパーサイエンススクールに指定された高校が，学校設定科目を導入し，体験研修を重視した活動や高大連携の推進を進めることによって，生徒のモチベーションの向上や学校の活性化，進路意識の向上につながったことを報告している。井上・成田（2007）[52]は商業高等学校における特別活動としての就業体験実習を実施することにより，フリーター志向を防止する効果があることを指摘している。この他，特別活動を活用して地域社会や大人とのつながりを持ち，協働して課題解決等に取り組む高等学校の実践事例の紹介（松田，2013）[53]や，18歳選挙の法制化における生徒会活動としての主権者教育の事例の報告（久保田，2017）[54]，キャリア教育としての

就業体験の報告（堀出，2014）[55] などがあった。

以上，特別活動の実態としては，進路指導偏重の傾向があることや集団活動をまじめにやらず，やり過ごそうとする傾向があること，学校のタイプや地域の特色があらわれることなどが確認された。特別活動の課題として身につけるべき資質・能力や，その学習過程が明確になっていないことが挙げられている（文部科学省，2018b）[56] が，学校のタイプによっても身につけるべき資質・能力や学習過程の実態が異なることが予想される。しかし，それらを実証的に捉えて検討した研究は見当たらなかった。また，学校における特別活動の取り組みが個人にどのような影響を与えるのかといった検討も必要だと考えられる。

(3) 特別活動の問題に関する知見

様々な効果や取り組みが挙げられる特別活動について問題も指摘されている。たとえば，高等学校における3年間の特別活動の展開を時系列で報告している西本・西原・井上・内海・大隈・由利（2002）[57] は，特別活動を通した3年間の成果を評価しながらも，生徒の成長は数値化できないため客観的に評価することができないと述べ，「目に見える学力」のみを追い求めるが故に「目に見えない学びの力」を培うことの大切さを見失ってはならないと述べ，自らの取り組みが，生徒の「目に見えない学びの力」を養ったであろうことを念じてやまないと述べている。自校の文化祭の意義や教育効果を明らかにするために生徒・教員を対象としたアンケート調査を行った齋藤・佐藤・神田・瀧澤（2015）[58] は，文化祭の準備の負担にアンバランスが存在することや，文化祭の活動が日常生活から乖離したものであること，生徒と教師の間では意識のズレが多くみられ，両者が理想としているものは異なっていることを指摘している。そこで彼らは，文化祭を能力育成の場とし，教育課程の中でより機能させるための方法としてPBL（Project Based Learning）の視点を踏まえて，改善方法を提案している。

以上，特別活動の問題としては，資質・能力の育成に向けた取り組みが客観的に把握できないことや生徒によってその取り組みに違いがあることなどが確認された。特別活動の効果としては集団への適応や心理社会的発達の促進などが示唆されている。特別活動に対する生徒の取り組みの違いによって生徒はどのような影響を受けるのか，さらなる実践的な研究が必要である。

【考察】

「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている現在，高等学校の特別活動の現状を明らかにするとともに，特別活動が「協働して学ぶ態度」の育成する場として機能する上で必要なことを検討するために，高等学校の特別活動における実践に関する先行研究を整理した。その結果，先行研究は少ないものではあったが，大きく「ホームルーム活動」と「特別活動全般」の2つのカテゴリーに分かれた。さらに前者の「ホームルーム活動」については，4つの知見に分かれ，後者の「特別活動全般」については3つの知見に分かれた。これらの知見から問題点をまとめると以下のことが挙げられる。

①ホームルーム活動の時間が限られている高等学校を考慮した計画的なプログラムが検討されていない。

②「主体的・対話的で深い学び」の実現につながる特別活動の取り組みへの検討がなされていない。

③特別活動は，集団への適応や心理社会的発達の促進が指摘されているが，その後の社会の適応や大学の初年次教育にどのような影響を与えているのか，明確にされていない。

以上，先行研究からの浮かび上がった問題点以外にも育成すべき資質･能力が明確にされていない点（文部科学省，2018）[59] や青年期の人間関係の希薄化（岡田，1991[60]；2016[61]），異質な他者との交流を苦手としていること（文部科学省，2011）[62] など「協働して学ぶ態度」を育成するために解決すべき課題は少なくない。さらに，高等学校の場合，生徒の学力や意欲などによって進路先が異なる「トラッキング」と呼ばれる学校格差があり（藤田，1990）[63]，各学校が抱える教育課題や生徒の実態が異なる現状があるため（耳塚，2014）[64]，求められる資質・能力の育成も学校によって異なる可能性がある。とくに大学受験のために一斉授業による知識伝達が中心となっている可能性が高い進学を重視した高等学校の場合,「学力の3要素」をバランスよく育成することが難しいことが予想される。

以上の点を踏まえると，今後，特別活動において「協働して学ぶ態度」を育成するためには，まず，各学校が現状に合わせた計画的なプログラムを検討する必要があると考えられる。高等学校における特別活動は生徒任せの活動になっていたり，就職や進学といった進路指導に偏っていたりする可能性がある。今後，「協働して学ぶ態度」といった学力の3要素を育成する上で特別活動が果たすべき役割は大きいと考えられる。教師は学校の現状に合わせて生徒たちにどのような資質・能力を育成したいのかを明らかにした上で，計画的に特別活動を進めていく必要がある。

2点目として，高校生の協働性を成立させる特別活動の学習のあり方をデザインする必要があると考えられる。現代の青年期の友人関係の希薄化については1980年ごろから指摘され，現在も変わっていないとされる（岡田，2016）[65]。その点を踏まえた場合，ただ協働の場を設定するだけでは，生徒たちの「協働して学ぶ態度」の育成は難しく，結果的に「主体的・対話的で深い学び」の実

現は困難なものになると考えられる。協働の必要性を生徒たちに実感させるとともに，教師が生徒たちの自律性を支援するなどの働きかけが求められる。

3点目として高校時代の特別活動が社会や大学の適応などにどのような影響を与えているのかを明らかにすることである。特別活動は心理社会的発達を促すとされているが，高等学校での特別活動の取り組みと卒業後の適応などについては研究がなされていない。今後，生涯教育を視野に入れた場合，「協働して学ぶ態度」とともに「学びに向かう力」の育成は必要不可欠である。特別活動が「学びに向かう力」の育成につながっているかどうかを調べるためにも，卒業後の適応や心理社会的発達を調べる必要がある。

以上，今後，特別活動において学力の3要素の1つである「協働して学ぶ態度」の育成するために必要なことを検討してきたが，これらの点を明らかにしなければ，「主体的・対話的で深い学び」の実現は難しいと思われる。今後，これらの課題に取り組んでいきたい。

引用文献

1） Rychen, D.S., Salganik, L.H. : Key Competencies for a successful life and a well-functioning society. Göttingen, Germany: Hogrefe & Huber, 2003.（立田慶裕訳 : キー・コンピテンシー －国際標準の学力をめざして　明石書店, 2006.）

2） 文部科学省 : 小学校学習指導要領解説総則編, 2017

3） 文部科学省 : 高大接続システム改革会議「最終報告」, 2016

4） 溝上慎一 : 用語集 学力の三要素 溝上慎一の教育論 , 2017. http://smizok.net/education/（参照2018-10-1）

5） 文部科学省 : 高大接続システム改革会議「最終報告」, 2016.

6） 江坂栄子 : 学級経営について：子どもたちが成長する学級作り 学び舎：教職課程研究, 7, 36-40, 2011.

7） 文部科学省 : 高等学校学習指導要領解説特別活動編, 2018.

8） 前掲載7）

9） 本田真大 : 高校生を対象とした集団社会的スキル訓練（ソーシャルスキル教育）が被援助志向性に与える影響 学校臨床心理学研究13, 25-34, 2015.

10） 星雄一郎 , 渡辺弥生 : 高校生に対するソーシャルスキル・トレーニングの標的スキルの定着化への取り組み　教育実践学研究 18（1）, 11-22, 2016.

11） 原田恵理子 , 谷村圭介 , 山田汐莉 , 渡辺弥生 , 安川民恵 : 高校生における小集団でのソーシャルスキルトレーニングの効果　日本教育心理学会総会発表論文集 49（0）, 36, 2007.

12） 小林真 , 稲垣応顕 , 丹保弘則 , 土合智子 , 山岡和夫 , 多賀香世子 , 菅原千香子 , 川上純子 , 池上道子 , 島美恵子 : 高校生に対するソーシャルスキル・トレーニングの効果　富山大学教育実践総合センター紀要 4, 15-23, 2003.

13） 森優貴 , 蓑﨑浩史 , 森本克明 : 不登校経験のある高校生の主観的学校適応感に対する学級集団を対象とした認知的再体制化および社会的スキル訓練の効果　　ストレスマネジメント研究 9（1）, 41-48, 2012.

14） 原田恵理子 , 渡辺弥生 : 高校生を対象とする感情の認知に焦点をあてたソーシャルスキルトレーニングの効果　カウンセリング研究 44（2）, 81-91, 2011.

15） 原田恵理子 : 学年全体を対象としたソーシャルスキルトレーニングの効果の検討　　東京情報大学研究論集 17(2), 1-11, 2014.

16） 前掲載15）

17） 木内隆生 : 高等学校特別活動で育成される合意形成力 : 協創体験過程の実践化に向けて　九州女子大学紀要. 人文・社会科学編 44（3）, 1-15, 2008.

18） 野崎浩之 , 渡邉満 : コミュニケーション的行為理論によるホームルーム活動の実践的研究　　生徒指導研究（13）, 3-18, 2001.

19） 田径 : コミュニケーションへの意欲を引き出す工夫 : 学級目標を決めるホームルームを例に（特集 学級の話し合い, 何から始めて何を育てる?）. 月刊学校教育相談 29（6）, 8-10, 2015.

20） 岡邑衛 , 歌川光一 : 高校生のコミュニケーション能力を育む学級集団に関する一考察 : 特別活動が目指す「望ましい集団活動」を視野に入れて　甲子園大学紀要（45）, 1-5, 2018.

21） 関根健雄 , 森下佳代子 , 田中仁 : ホームルーム活動におけるアクティブラーニングの基礎的スキルの向上に関する実践 : MASTの第一歩　　小山工業高等専門学校研究紀要（49）, 15-22, 2016.

22） 関根健雄 , 森下佳代子 : ホームルームにおける手帳指導の有用性とアクティブ・ラーニングの基礎的スキルの伸長に関する実践　小山工業高等専門学校研究紀要（50）, 27-35, 2017.

23） Covey, S.R. : The 7 Habits of Highly Effective People. Free Press, 1989.（ジェームス・スキナー , 川西茂（訳）7つの習慣 : 成功には原則があった！ 個人, 家庭, 会社, 人生のすべて』, キング・ベアー出版, 1996.

24） 中井亜由 : 高等学校普通科におけるキャリア教育カリキュラムの開発--特別活動を中心として　長期研修員研究報告 3, 65-68, 2004.

25） 堀出雅人 : 特別活動の時間における就学体験を通して形成されるキャリア意識　佛教大学教育学部学会紀要, 13, 159-166, 2014.

26） 林幸克 : 高等学校におけるキャリア教育に関する実証的研究 : 高校生と小学生の交流活動に着目した分析　日本特別活動学会紀要（23）, 41-48, 2015.

27）長谷川誠 : 中学校･高等学校のキャリア教育における「特別活動」の役割 : 不安定化する社会で求められる「能力」形成に注目して　佛教大学教育学部学会紀要 14, 95-108, 2015.
28）住岡敏弘 : 目標管理を利用した特別活動の展開 : 高等学校「ホームルーム活動」における進路指導を例として　東亜大学紀要 (1) , 59-64, 2003.
29）渡辺誠一 : キャリア教育を取り入れた3年生ホームルーム活動の実施　長野工業高等専門学校紀要, 46, 2-4, 2012.
30）木村正徳 : グループ・アプローチとその実際的研究―キャリア教育への実践から―　和歌山県教育センター学びの丘研究紀要2008, 2008.
31）前掲載7）
32）大谷哲弘 : 高校生の学級適応を支援するためのグループアプローチプログラムの検討 : 教員が実践する時の生徒集団, 教員及び校内体制の実態に応じた工夫　学校心理学研究 16 (1) , 57-76, 2016.
33）増田明史 , 内田一成 : 高校生の対人関係に及ぼす集団主張訓練プログラムの臨床効果　上越教育大学心理教育相談研究 6 (1) , 37-49, 2007.
34）木村佳穂 , 苅間澤勇人 : スクールカウンセラーによる高校新入生の学校適応への支援 : 構成的グループエンカウンターを活用した援助　学級経営心理学研究, 2 (1) , 74-83, 2013.
35）井上仁志 , 成田滋 : コミュニケーション･ゲームによる高校生の学級内人間関係づくりの試み　日本教育心理学会総会発表論文集, 45 (0) , 634, 2003.
36）木内隆生 : 高校ホームルーム活動における道徳授業プログラムの開発--課題解決的なグループワークを通して行う在り方生き方教育　道徳と教育, 55(329) , 41-52, 2011.
37）林良樹 , 河合士郎 , 荒木孝子 , 金沢節子 : 人権・同和教育HR「戦争と人権」の実践　研究紀要, 42 (2) , 167-211, 2001.
38）末藤美津子 : 特別活動の新たな課題 : 多文化共生をめざした取り組み (心理学以外の分野)　東京未来大学研究紀要, 1, 45-55, 2011.
39）越野章史 : 高等学校におけるシティズンシップ教育としての特別活動実践　和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, 21, 125-134, 2011.
40）宮前耕史 : 地域に対する愛着および協働意識を養い育む特別活動 : 島根県立隠岐島前高等学校の人間体験「ヒトツナギ」ESD・環境教育研究, 17 (1) , 43-54, 2015.
41）藤原靖浩 :「防災教育訓練」(特別活動) の教育効果 : 中･高校生の防災意識の高まりに着目して　日本生涯教育学会論集, 37, 123-132, 2016.
42）保田直美 , 保田時男 : 初年次教育と高校における特別活動　関西大学高等教育研究, 5, 17-28, 2014.
43）河本愛子 : 中学・高校における学校行事体験の発達的意義 : 大学生の回顧的意味づけに着目して　発達心理学研究, 25 (4) , 453-465, 2014.
44）高瀬博 , 長島康雄 , 久永哲雄 : 高校時の「特別活動等」がコンピテンシー向上に及ぼす影響に関する一考察　関東学園大学紀要, 25, 29-38, 2017.
45）樽木靖夫 , 髙田麻美 : 児童会・生徒会活動の体験的学びに関する研究　千葉大学教育学部研究紀要, 66(1) , 247-253, 2017.
46）前掲載42）
47）山本明利 : 学生アンケートに見る高等学校における特別活動の実態 (1) 北里大学教職課程センター教育研究, 2, 85-92, 2016.
48）山本明利 : 学生アンケートに見る高等学校における特別活動の実態 (2)　北里大学教職課程センター教育研究, 3, 93-101, 2017.
49）伊藤晃一 : 定時制高校の特別活動における生徒たちの「やり過ごし」方略についての一考察―生徒たちへのインタビューをたよりに―　千葉大学大学院人文公共学府研究プロジェクト報告書 , 324, 11-22, 2018.
50）西川知子 : 農業高校生の文化祭活動に対する取り組み意識の男女差　山形県立米沢女子短期大学附属生活文化研究所報告, 45, 161-174, 2018.
51）中川和倫 : SSHでここまできた～高大連携の推進･進路意識の高揚・課題研究の活性化　日本科学教育学会年間論文集29, 301-304, 2005.
52）井上仁志 , 成田滋 : 高等学校商業教育における特別活動としての就業体験実習を通した進路指導の検討　学校教育学研究, 19, 1-6, 2007
53）松田淑子 :「特別活動」「総合的な学習の時間」を土台とした社会とつながる学校の在り方への提案－高等学校における実践事例をもとに―　福井大学教育地域科学部紀要応用化学家政編, 4, 297-312, 2013.
54）久保田治助 : 18歳選挙の法制化における生徒会活動としての主権者教育 : 鹿児島市の事例を中心に　鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編, 69, 193-203, 2017.
55）堀出雅人 : 特別活動の時間における就業体験を通して形成されるキャリア意識　佛教大学教育学部学会紀要 13, 159-166, 2014.
56）前掲載7）
57）西本眞 , 西原利典 , 井上芳文 , 内海良一 , 大隈教臣 , 由利直子 : 高等学校における3年間を見通した特別活動の展開 : 自主活動を中心に据えた活力ある集団づくりの試み　広島大学附属中・高等学校研究紀要, 49, 93-108, 2002.
58）齋藤洋輔 , 佐藤亮太 , 神田春菜 , 瀧澤政彦 : コンピテンシー・ベースによる学校行事の再評価－辛夷祭の教育効果の評価に向けて―　東京学芸大学附属高等学校紀要, 53, 53-66, 2015.
59）前掲載7）
60）岡田努 : 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研

究 東京都立大学心理学研究, 1, 11-18, 1991.
61）岡田努：青年期の友人関係における現代性とは何か 発達心理学研究, 27（4）, 346-356, 2016.
62）文部科学省：子どもたちのコミュニケーション能力を育むために〜「話し合う・創る・表現する」ワークショップへの取り組み〜の審議経過報告の取りまとめ, 2011.
63）藤田英典：社会的・教育的トラッキングの構造 菊池城司（編） 現代日本の階層構造③教育と社会移動 東京大学出版会, 127-154, 1990.
64）耳塚寛明：多様化の中の質の保証―高校教育政策の新局面― 樋田大二郎, 苅谷剛彦, 堀健志, 大和田直樹（編著）現代高校生の学習と進路 学事出版, 136-142, 2014.
65）岡田努：青年期の友人関係における現代性とは何か 発達心理学研究, 27（4）, 346-356, 2016.